

令和元年度第1回 新潟県・新潟市調整会議後の記者会見(要旨)

会見者：北川顧問、花角新潟県知事、中原新潟市長

令和元年8月7日(水) 14:15~14:30 於：新潟県庁 201 会議室

(北川顧問)

今日まで、最初の新潟州構想検討委員会から7、8年、座長や顧問を務めさせていただいたが、新しく花角知事、中原市長になり、今まで積み上げてきたことが下地になって、ようやく具体の形として新潟都心の都市デザインという形に結びついた会議だったと思う。もともと県と政令市はうまくいかないというのが世の中の常識であったが、それを取り払う努力をして、県と市が1+1が2とか3、4、5に発展する機運ができ、都市デザインにつながったことは、大変いいことだと思う。

明治4年に廃藩置県が行われたときの東京の人口は70~80万人と言われている。初年度はトップではなかったが、その後は大体新潟県が全国で一番人口が多い県だった。コメの生産量が大きかったことと、北前船の拠点であったことがあり、日本最大の県だった。しかし中央集権が進んで150年経ち、東京都は約1,300万人で、新潟はどんどん人口が減っていくという、こういう現実を見据える必要がある。現在は、中央集権で画一的な体制から、地方分権による多様な国づくりへの転換が図られている。最近では産官学金労言という、金融や労働、言論界等も入りまちをつくっていく動きがあるが、その先駆けとして、県と市で協働して多くの場面で協力していこうという形ができたことは、本当にすごいことだと思う。

そして、新潟県と新潟市が先に行ったので、当初は、他の市町村とはどう連携するのかという議論、県議会や市町村から州構想とは何かというような意見もあった。したがって、一気に州構想に行くのはいかがかということで、県と市が協力して実現可能な最大値を求めていけば、こんなにいいことがあるということを証明する7、8年であったと思う。

これまでの取組の成果が上がってきて、現知事・現市長に引き継がれて、この2人はさらにそれを具体化して、そして日本海側の首都、いわゆる拠点としてのあり方をやっていくときに、まず新潟県全体のことと、新潟市の港湾のことも含め、陸海空の拠点都市化を都市デザインしようということで、それに対して、県も一緒になってやっていこうという、こういう個別具体の政策が生まれてきたということなので、これからは他の市町村や議会、民間経済界をはじめとする、多様な主体の方にも説明していただき、新潟県からこの国が変わっていくんだという、国からの一方的なお仕着せの地方創生ではなく、こちらが変わっていくことによって、国が変わる、例えば、県と政令指定都市とが調整会議を持たなければならないと法制化されたが、これのひな

型となったのは、新潟県と新潟市の新潟州構想検討推進会議がもとで、それを見て国が変えたので、そのような事象は、この場所からどんどん生まれてくれば非常にいいと期待をしている。

この7、8年の間、県は県、市は市でそれぞれが縦割りの中で限定された仕事をしながら成果を果たしてきた職員が、県市共同体という非常に不慣れなことで、県営住宅と市営住宅の問題や、県立と市立の文化施設の問題なども一生懸命こなしてきたのは、事は小さいかもしれないが、中身は働き方改革の先取りでもあったので、これらの努力に対しては敬意を表したい。普段の仕事にプラスして、新しい形態のあり方を追求するので、難しい点もあったと思うが、ぜひ、この新潟都心の都市デザインをスタートに、新潟県、新潟市と、さらには長岡であってもどこであっても、どんどんそういうことが出来上がっていきながら、いわゆる地方創生の本筋、地方から国が変わるということについて、新潟がトップバッターとして参加し、全国をリードしていただけたら嬉しいというふうに期待している。

これまで、私が座長や顧問を務めてきたが、これから新しい体制が出来上がって、新しいことに挑戦するということで、顧問の座は下りさせていただき、折々にはお呼びいただける格好になるが、そういった形で私もお協力させていただければと思っていますので、今日までのご苦勞を共にしていただいた皆様には感謝を申し上げます。

(花角知事)

今、北川顧問からおまとめいただきましたけれども、まずは、10年近く顧問には県と市の中に立っていただいて、新潟州構想の検討から二重行政の問題、そして、直近では新潟の都市機能の向上ということで、本当にお骨折りいただき、また、ご尽力いただき、心から感謝申し上げます。まさに顧問や先人の皆様のおかげで、私は就任以来本当に違和感なくスムーズに、中原市長と率直な意見交換ができる、対話ができる、そういう環境を得ることができたと思っています。これまでの皆様の努力の上で、さらにこの県と市の連携、協力関係というものを深めていきたいと思っています。特に直近では、新潟市は県の顔でもあり、県の発展は新潟市の発展とも重なっており、その新潟市を元気にしていくための都市デザイン、これを着実に実現していくというところでは、個別のプランや推進に向けた会議もできて、着実に実現に向けての歩みが始まってきているので、こうした会議などを着実に動かしながら、県市協力して、新潟市の活力の向上と、それを通じた県全体の発展に取り組んでいきたいと思う。この県市調整会議は、これから随時、必要なときに市長と相談して開催する形になるが、テーマに応じて、北川顧問にも参加をお願いすることが多々あるかと思うので、引き続きお付き合いと、励ましの目で見させていただきたいと思う。

(中原市長)

市長に就任以来、この会議は初めての出席となった。北川顧問とは若いときからのご縁があるが、今日は、北川顧問からの的確なご助言をいただき、大変ありがたいと思った。特に時代が大きく変化する中で、それぞれ県市のトップの役割は大事で、幹部と一緒に大きな方針を決めて努力をすると、県市に広がって、官と民のwin-winの関係になる、そういうベースができていますので、これからしっかりと県市連携してがんばってほしいと、こういうエールをいただいたと思っている。また、ことあるごとに花角知事とは意見交換させていただいているが、今日は北川顧問も加えた中で、花角知事と率直かつ有意義な意見交換ができたと思っている。特に、新潟市の拠点化をどう向上させていくかという理念、方向性を県市が共有して、互いに力を合わせて、今後一層進めていくことが確認できた。今後は、本日の意見交換を踏まえて、できるだけスピード感を持って、具体的な取組を着実に県と連携して進めてまいりたい。

【質疑】

Q 先ほど、花角知事から、今後調整会議は必要に応じて開催するという説明があった。これまでは年に1回、定例的に開いていたと思うが、今後はそういう形ではなくなるということか。

(花角知事)

頻度がどうなるかはわからないが、今日合意した今後の調整会議の運営において、調整会議は知事又は市長が必要と認めるときに開催するということにしている。必ず年1回やるのか、やるときには続けて何回もやるのか、テーマによってはそういうこともあると思う。また、これまでも1年に1回必ずやるというルールではなく、たまたま慣例的にやっていたということで、やり方を変えるわけではない。

Q 花角知事に伺う。都市デザインの実現に向けて、財政難が課題になると思うがどのように考えているか。

(花角知事)

県の行財政改革そのものについては、今まさに議論をしている最中で、近いうちに行動計画をまとめて、県民の皆様にお示しをしていく予定にしているが、基本的には、新潟市の都市デザインを実現していき、都市の機能の向上を図り、新潟市が日本海側の拠点都市として活躍していける環境を作るために県として最大限協力をしていき

たいと思う。協力の仕方は様々あり、もちろんお金が必要な部分もあると思うが、よく相談をしながら、知恵を出していきたい。

Q 同様の質問を中原市長に伺う。市長選で拠点化を掲げて当選され、(拠点化を)進めてきていると思うが、新潟市も財政難であると思う。その点、どのように考えているか。

(中原市長)

今年度から3年間、集中改革期間ということで、まもなく9月には集中改革の中身を提示して、市民の皆様からご理解をいただきながら、行財政改革を進めていくことになるが、新潟市の拠点化については、選挙時の公約、また、市長に就任してからの新潟市政の最優先事項であるので、確かに財政は厳しいが、財政の状況を見ながら、まちづくりのために着実に推進していきたい。

Q 知事と市長に伺う。今日の会議の中で、特に重点的に話し合った内容や、出てきた課題はあるか。

(花角知事)

今日の調整会議の大きな議題は2つあり、1つは新潟市の都市デザイン。昨年定めたものを、どういう形で進めてきているか、その進捗の状況を確認した。今後も着実に進めていこうということで、合意したことが1点。また、これまで二重行政の解消という形で、どういうことがやられて、実現できて、今どういう状況になっているかということも確認をしたというのが、主な議題であった。それはそれで現状の確認をし、共通の認識を持ったところであるが、それ以上に、私としては、北川顧問から、新潟発で日本を変えていくような、まさに真の地方創生を進めていく気概を持って取り組んでほしいというエールをいただいたことが、一番大きな成果だったように思う。

(中原市長)

今知事がおっしゃったとおり、都心の都市デザインの実現に向けたこれまでの取組の確認と、今後の取組を進めていく中で、官だけではなく、民からも支援をしていただく必要があるというところが1つのポイントだったと思う。